

遠星北斗遺稿

コタン





コタン

遺星北斗遺稿

定価一、八〇〇円

著者

違星北斗

Hokuto Iboshi; 0023-0011-4289

発行日

一九八四年一月一日

発行者

文正吉

発行所

株式会社

草風館 ©

東京都千代田区神田神保町二二三 千一〇一
電話 東京二三九一八六〇 振替 東京五九四〇二六

編集協力

藤本英夫・木ノ内洋二・青木延広

装丁・構成

菊地信義

制作

内川千裕

印刷

松澤印刷・栗田印刷

製本

今泉誠文社



遠星北斗

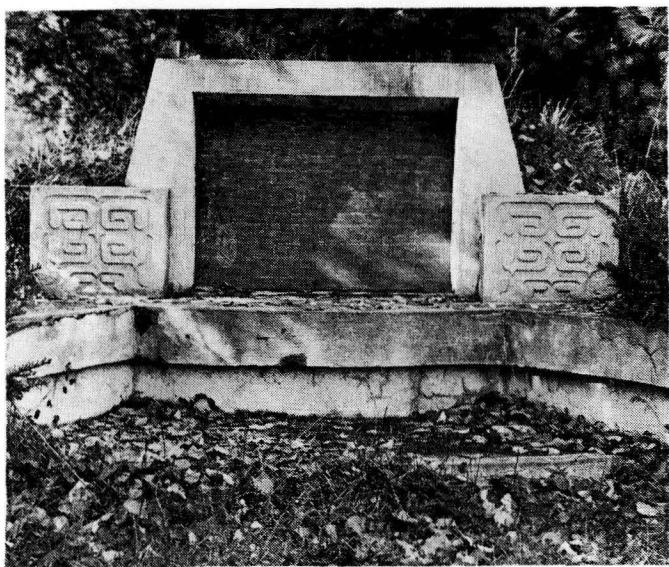


遠星北斗蓮稿

ンタコ



『コタン』初版本の表紙



遠星北斗の歌碑。平取町立二風谷小学校△庭に所在。河野本道撮影。

目次

フゴッペ 7

エカシ・シロシ 31

北斗帖 45

日記 73

コタン創刊号 95

落穂帖 131

年譜 170

凡例

一、本書は、現在可能の限り集められた遼星北斗の遺稿を収録、編集したものである。

一、本書に収録するにあたり原文の明らかな誤字・誤記は訂正し、読み易くするため拗音・促音のみ現代的用法に則った。

一、『コタン』の原本の目次は、疑ふべきフゴッペの遺跡（本書ではフゴッペ、以下同じ）、我が家名・淋しい、元気・郷土の伝説・コクワ取り・アイヌの誇り（以上、エカシロシ）、私の短歌・俳句（以上、北斗帖）、附録「コタン」創刊号（コタン創刊号）と便宜上整理編集し、その後発見された資料は『落穂帖』として一括した。なお、新しく収集した資料には、『コタン』と重複するものがあるが、初出を考慮してあえて収録した。

フ
ゴ
ッ
ペ

疑ふべきフゴッペの遺跡

奇怪な謎

フゴッペの丸山に奇形文字と石偶が発見されたことは、考古学上の一大問題であり、我等アイヌにとっても奇怪な謎であった。

果して何を語るものだらうか。愛郷の念禁ずるあたはず郷土を誇りたい願ひは敢て人後に落ちない者であるが、名物の為に学説を断じて曲げてはならない。疑ふべきを疑ひ信すべきを信する、慎重な態度で厳正討究を尽さねばならない。然し軽率に否定して、まかり間違へば貴重な史跡を煙滅に導く恐れあり、或は単なる名勝気分から疑を排して肯定しては、これ亦、日本に生立ったうら若き土俗学への害毒であるのである。科学万能に中毒しても困るが、それかというて徒に想像を逞しうしてもそこに確たる傍証がなくしては畢竟想像は想像に了るの外はないのである。

私は、アイヌであることを幸にしてこの土俗学的に、而も實際私

其の経験することの出来るものを比較研究して、どれだけの疑問があるかを述べ、併せて江湖の叱正を仰ぎたいのである。

一 フゴッベ丸山

往古「鍋を持たない土人がゐて生物ばかり食べてゐた」といふので、その土地を、フーイベと余市のアイヌは名を附けてゐた。然るに同じ土地を忍路おしるのアイヌは、蛇が沢山ゐるところだったのでフウコンベツと呼んでゐた。

地名及び領域を調査した開拓当時、はしなくもこの土地が問題になった。余市アイヌは、蘭島とフゴッペの中間の山を境界に余市領だと主張したのに反し、忍路のアイヌは、否、ポントコンボをもつて境界とすると争うたといふ。結局余市の主張したことによって決定して以来フウコンベとなまりて畚部の文字を宛てたといふ。

ポントコンボとは今問題の中心である丸山の原名である。Pon tokompo とはその形が小さいこぶに似てゐるところから発生した。一名これを Mo chashi-kot ともいはれてゐるが、或人はそれはポンチャシコツの間違ひであらう（西崎氏の裏山の事）といはれてはゐる。

るが、単に家の形に似てゐる山といふところにより、モチャシ・コツと称されたのではなく、フーイベといはれた時代の住宅地跡？に關係があるものではないかと思はれるのである。

私はこの夏、余市における先住民族遺物分布地々図を作るべく調査した時、今の丸山は遺物散布地に囲まれてゐることゝ丸山の西北側十間（鉄道より八尺）程の地点に、小さな貝塚のあること等を認めたのであるが、今是を考ふるにポイントコンボの名称よりもモチャシコツの方が或は古いのではあるまいかと推されるのである。

二 先住民族は非アイヌ

祖先を尚ぶことは尤もアイヌの特徴である。にもかゝはらず、全国を通じて大規模にある遺跡についてアイヌはこれを自分等の祖先のものに非ずといふ強固な説を立ててゐるのは何を物語つてゐるのか。この生々しい貝塚や、土器や石器を製作の方法も知らず、更に使用の目的も不明であるとはそれは単に長年月を経過したばかりが理由でなく、やっぱり先住民族は非アイヌであることを裏づけてゐるものではあるまいか？

神秘的古典神話を忠実に伝承して来たアイヌが、石器や土器を生活品に用ひたといふことが少しも伝へてないといふわけではないのである。アイヌは先住民族を矮小な人種だと伝へてゐることは既に知られてゐる通りである。私は「だから小人^{こびと}が實在してゐた」とは結論するものではないが、しかしアイヌ人種以外に他の種族が全然居らぬといふ証拠にはならない。

殊に尊敬すべき祖先の力作を架空な人種のお手柄に移転するが如きはありうべきことではないと想像するに難くないのである。小人説はあまりにも誇大無稽のやうではあるが、その幾割かの事実をひき出す端緒となるのである。即ち当時のアイヌよりも確に脊も低かつた者がゐたといふその實在の反映であることは否定出来ないのである。

これについて有力な異説を発見した。先日余市のチャシについて北海道史の附图の相違点を教示してもらふべく、余市第一の古老ヌプルラン・イカシを訪うた時、コロボツクルの話を聞いた。

イカシはいふ「お前はコロボツクルといふが、それはさうぢやない Kurupun, unkur といふんだ」「クルは岩だ。水かぶり岩だ。ナニ水の底にあるごろんだ(粒々の)石のことだ」「ナンデモ石に親

しんだもので恰も石の下にでもゐるやうな人種だからアイヌはこれを形容してクルブンウンクルとよんだもんだ」との意見であった。

(昭和二年七月三日)

私は非常に面白いと思った。私の兄に話したら「馬鹿いへ、水かぶりの石の下……サル蟹ぢやあるまいし」と一笑に附されたのであるが、発音は Kurupun, unkur といふのが正しいと父もいつてゐたのである。石に親しんだものだから石の下の人とよび、脊が低かったから色々な説話も生れたものであって、要するに実在の重大な反映と做すものである。

クルブンウンクル、それは純人類学者によつていづれの人種に属するか？ 懸案であると思ふ。

三 読まない文字

その昔、シャモ（内地人）とアイヌが物々交換をやつてた頃は「始まり」と一本づゝ数をごまかされたといふ有名な話があるが……然しそれでも「十よ」といへば、縄に結び目一つ加へて記録に表示したといふ。これを学者は結縄文字と名付けてゐる。

我々は文字といへば、直に読むものとのみ思つてゐたに、読まない文字があつた。原始絵画がそれである。また言語といへば声を使ふことのみと思はれやすいが、全然声を要せない言葉がある。言語学者の説を請売りするまでもなく身振語である。数理にうといアイヌが記憶の継続を計るために発明した記号は Toppa shiroshi といふて、単に縄ばかりでなく、棒に刻み目を彫けて明確を期したといふ。私はこれを仮にトッパ文字と命名しておく。世界文明史に一大進歩の足跡を印することの出来た文字でも、その先驅をなしたものはやはり單純なトッパ文字式のものより起り、絵画や象徴的記号が時代と共に發達したことは事實である。

アイヌのトッパ文字について面白い一例を挙げるならば、根室の奥地、標別原野（しづ）を測量した当時北見から来たアイヌの人夫サンケチヤチャがドロの細枝を皮むきにして持つて歩き、一日暮すと件の棒に一つ刻み目を入れる。毎日それが彼の日記のやうに反復してゐた。そして彼にだけわかる刻木は良く彼の記憶を継続され直感的に表示されたものと、間宮鴻一郎氏の談である。

原始的圈内より出でなかつたアイヌのトッパ文字は、思想の伝達——言葉を書す符号——とまで發達しなかつた。たゞ單に記憶を呼